

対人援助学&心理学の縦横無尽 (29)

ヤーンの古希を言祝ぐ：日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大（1）2008 年まで

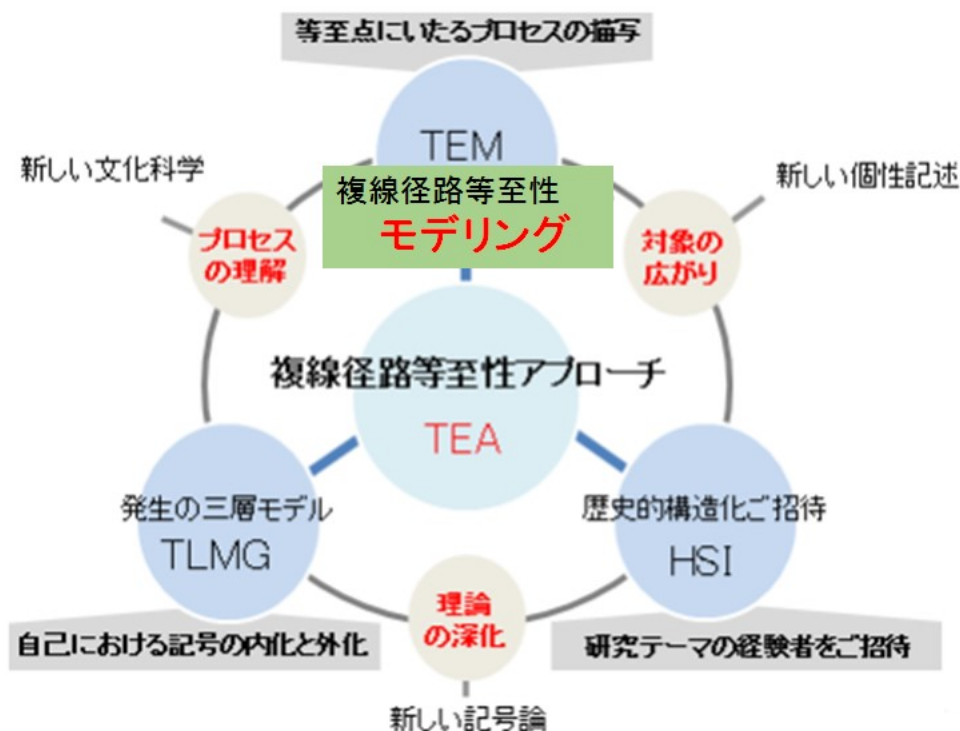
サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・土元哲平

1 Valsiner 教授と日本の心理学

1-1 はじめに

このエッセイでは、ヤーンの愛称で親しまれている Jaan Valsiner 先生(1951 年 6 月 29 日生)の 70 歳の誕生日を祝う準備をする。私たちがヤーンと共に TEA（複線径路等至性アプローチ）を開発してきた過程やヤーンが日本の質的心理学のコミュニティに貢献してきたことを紹介していく。

TEA は、3 つのサブコンポーネント(Sato, Yasuda, Kanzaki and Valsiner, 2014)、すなわち、Trajectory Equifinality Modeling(TEM)、Historically Structured Inviting(HSI)、Three Layers Model of Genesis(TLMG)から構成される文化心理学における方法論である。



さて第 1 著者であるサトウタツヤがヤーンのことを初めて知ったのは 1997 年であった。当時、第 1 著者は福島大学行政社会学部助教授であり、東京大学文学部（心理学研究室）に心理学史研究のためにサバティカル滞在をしていた。受入教員は高野陽太郎教授であった（佐藤隆夫教授ともその時に出会い、いわゆる腐れ縁が今に至るまで続いている）。そして、同時に教育学部の箕浦康子教授の「マイクロエスノグラフィーの方法論セミナー」に毎週参加していた。そのセミナーでヤーンの名前が出てきて、研究の面白さが印象に残ったのである。

その後、第 1 著者がヤーンに初めて会ったのは 1998 年 8 月 12 日。彼が 47 歳、私が 36 歳の時だった。第 1 著者は心理学史の研究と明治時代の日本人心理学者の足跡を調べるための科研費調査グループの一員（代表・西川泰夫教授）としてクラーク大学を訪れたのである。ヤーンは日本の心理学史研究者たちをもてなす昼食会を開いてくれた。この時はサバティカル滞在していた北海学園大教授小島康次先生（当時）に大変お世話になった。



TEA（複線径路等至性アプローチ）に関する本格的な学術交流が始まったのは 2004 年である。立命館大学は 2003 年度にヤーンを客員教授として招聘した。なぜ第 1 著者が彼を招聘しようと思ったかという、彼の発達心理学と心理学史の両方の分野での優れた業績を尊敬していたからである。

1-2 ヤーンの考えを知る

ヤーンの招聘が決まったのは 2003 年初頭であり、彼が実際に日本に来るまでには 1 年の猶予があった。そこで、私たちはヤーンの本を読んで勉強することにした。立命館大学のメンバーに加えて、当時京都大学の教授だったやまだようこ先生とその教え子たちなどが参加してくれた。

使ったテキストは、『Comparative study of human cultural development』（Valsiner, 2001）であった。とにかく参加者全員にとってとても難しかった。恐ろしい経験ですらあった。私たちが彼の考え方をよく知らなかったことが原因だが、その学問的背景についても知らなかったので難しかったのである。

集中講義は、立命館大学の高木和子教授（当時）や大学院生の他に他大学の院生や教員も参加するにぎやかなものになった（保坂裕子・川島大輔・徳田治子・斎藤久美子の皆さんの顔が確認できる）が、日本人は皆わからないことだらけ。しかしそれなりに知的にくらいつく講義となった。



以下のうらる（URL）アドレスにー非常に短いが一動画がある。

http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/diarybox/Val/VAL04/0128/MVI_0626.AVI

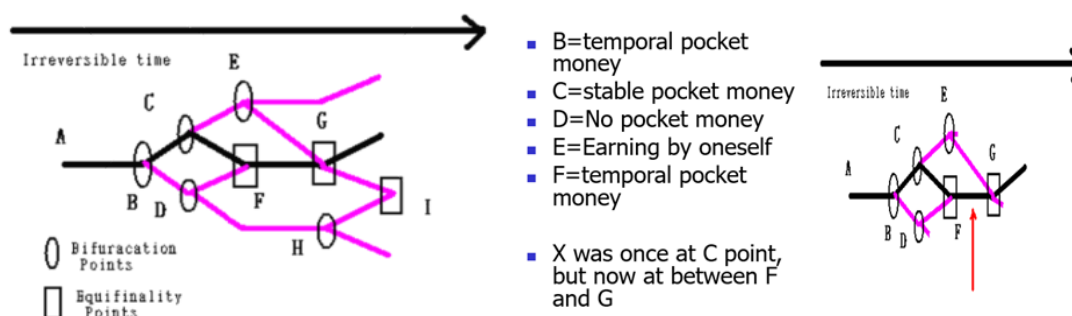
http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/diarybox/Val/VAL04/0129/MVI_0654.AVI

そして、第 1 著者は日本の心理学者たちと共に 2004 年 1 月 25 日に文化心理学シンポジウムを企画した。ヤーンに加えて、当時日本に一時的に滞在していたアメリカやドイツの心理学者を迎えてシンポジウムを行ったのである。第 1 著者は、子どもがどのようにお小遣いをもらい始めるのか、を発表しようとした。第 1 著者

が分析しようとしたケースは以下の様であった。

韓国のある子どもが、一度、母から定期的なお小遣いをもらったけれど、管理できずに叱られてお小遣いを取り上げられた。しかし、韓国では、子どもたちがオヤツをたべる時に、誰か一人が順番に全員分支払うという習慣がある。だから、彼はまとまったお小遣いが必要であり、彼は母にもう一度定期的なお小遣いをもらえるようお願いしている。

このケースを私は最初、タイムライン的な一次元で表していた。しかし、同時に私は物足りなさを感じていた。ナカナカ分析の視点が定まらなかったのである。その時、第1著者は、何が起きたのか、正確には覚えていない。確かなことは、ヤーンの「発達における等至性」というダイアグラムをみて、このスキームが分析に使えると感じ、分析に試してみたということである。そして、このダイアグラムは、私たちを苦しめたあの本 (Valsiner, 2001) に掲載されていたものである (Fig.3.4;P62)。溺れる者は藁をも掴むという心境だったのであろうか。いずれにせよ、このダイアグラムの助けを得て、定期定額のお小遣いをもらうという現象を二次元で表すことができたのである。



1-3 シンポジウム後のヤーンの感想と驚くべきオファー

ヤーンはこの文化心理学シンポジウムについて以下のようにコメントしている。

この文化心理学シンポジウムは、日本人とアメリカやドイツの客員研究者が一堂に会して、心理学における文化現象の新しい研究方法を構築する方法について議論するという、本来の目的を最大限に満たしたものでした。今回の発表では、これまで知らなかった新しい知見をいくつも得ることができ、とても嬉しかったです。やまだようこ氏は、日本とヨーロッパのライフコースの描写がどのように異なるのかを、日常の文脈の中で生活者の生活を整理するという同じ文化心理学的機能を果たしながら、エレガントな発表をされていました。抱井尚子氏は、クリティカルシンキングの文化的規制の問題を参加者のオープンな議論の中に持ち込んで、ハワイの異なる情報提供者が、クリティカルなアプローチで思考を進めることが何を意味するのかをどのように概念化しているのか、また、人と権威の意見との間のダイアログがどのように進行するのかを示しました。サトウタツヤ氏は、子どもたちがお小遣いをもらうーもらわないという現象が、ミクロ文化的な交渉と、子どもたちの価値社会化というより広い社会問題とを結びつける上で、いかに重要であるかを示しました。箕浦康子氏は、第三世界の国々で国際援助--医療サービス--を導入するためには、文化心理学がいかに必要かを示しました。妊婦がより良い妊産婦医療を受けられるようになるためには、文化心理学的な障壁が多く存在することが示されました。Friedlmeier氏は、同じ基本的な社会的プロセスである親が子どもの感情をコントロールするというプロセスが、ドイツと日本では2つの異なる構造的な形態をとることがあることを示しました。最後に小嶋秀夫氏からは、すべての発表について建設的なまとめの解説がありました。



さて、シンポジウムの次の日か二日後、ヤーンは第1著者に思いがけない提案を投げかけてきた。それは、彼と一緒に本の一章を書こうというものだった。第1著者はそんなことを全く考えていなかった。シンポジウムが終わってヤレヤレ、と思っていた程度である。しかし、この提案は第1著者とその時の大学院生・未来の大学院生がより大きなネットワークの一部になるための第一歩であった。

彼はまた別の提案をしてくれた。その年の8月に中国で開催される“国際心理学会議（ICP）”に参加しないかと誘ってくれたのである。「心理学における方法論的植民地主義の終焉：サンプルから個人の体系的研究への回帰」というシンポジウムでエントリーしているので、そこに参加して立命館大学のシンポジウムの内容を発展させて話してほしいという話である。いきなり登壇者が増えていいのか？むちゃくちゃな話である。

この話は全く予想外のことだったが、第1著者は参加することにした。当時大学院生だった第2・3著者の安田裕子、木戸彩恵と一緒にデータ分析や発表の準備をすることにした。この過程でTEAを用いてデータ分析するためのコンセプトの一部が明確になっていったのである。彼女らは現在、大学の教員であり、このエッセイの共著者でもある。ヤーンからの2つのオファーとその受諾の決断は、TEAの発展の大きな礎となっただけでなく、私たちの人生そのものを大きく変えていくことになったと言えるだろう。

1-4 2004年1, 2月における日本の研究者との交流

ヤーンは札幌（北海道大学・北海学園大学）や奈良（奈良女子大学）の研究者との交流の機会を持った。また、ATR（国際電気通信基礎技術研究所）でロボット研究を、京都大学霊長類研究所で比較認知科学研究を、それぞれ視察した。日本の研究者たちは、彼の深い心理学理論だけでなく、その気さくな人柄にも魅了された。2004年、ちょうど日本質的心理学会が設立され、初の大会が秋に計画されていた。大会実行委員長の京都大学・やまだようこ教授（当時）は、第一回大会のメインゲストにヤーンを招聘することを提案し、奈良女子大学の麻生武教授（当時）はもろ手をあげて賛成した。彼もまた、ヤーンに魅了されていたからである。こうして、ヤーンは同年に二度目の来日が決まり、以後、何回も来日することになり、交流の輪も広がっていった。

さてヤーンは離日後、途上のドイツから、「ありがとう！... 日本滞在後の生活は全然違う...」というタイトルのメールを第1著者に送ってきた。

日本の後のヨーロッパはとても混乱して荒れて見えた...私は普段ヨーロッパを理想としているが、今はドイツでさえも混乱して見えていて、パリはどちらかというと田舎っぽく見えた...エストニアの魂の上に日本の影響があっそう見えたのだと思います。

日本が素晴らしくオーガナイズされている国だという彼の印象はそれ以来揺らぐことはない。そして、このメールの後段には進行すべき仕事についての言及があった。

1) *EQUIFINALITY POINT SAMPLING* に関する私たちの章をさらに考える機会がありましたか？私はあなたからのいくつかの提案を必要としています - 今考えているタイトルなど - 私たちについての情報を本の編集者 (Juergen Straub) に送るために。

2) 私はできるだけ早く 9 月 11 日の訪問のための航空チケットを購入するつもりです (なるべく安い価格を探しています)。だから、私は 11 日の学会発足のためにすべてがうまくいっていると仮定しています。

TEA (複線径路等至性アプローチ) の発想が「等至点サンプリング」というアイディアに由来すること、日本質的心理学会オンライン第 1 回大会のためにスケジュールを調整していることなど、ヤーンの初来日後に多くのことが動き始めていることがわかる。

こうして、ヤーンの初来日は、日本の研究者たちに様々な果実を残し、また、将来花を咲かせるであろうたくさんの種を残して、終わったのである。

最後に、ヤーンの宴会シーンをいくつか紹介しておく。箸を器用にあやつりたこ焼きや味噌煮込みうどんを食べる姿である。



ヤーンの初来日における様々な出来事は当時つくった以下のウェブサイトを参照されたい。

[Valsiner in JAPAN! 2004 \(ritsumei.ac.jp\)](http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/diarybox/Val/VAL04/Index.html)

<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/diarybox/Val/VAL04/Index.html>

2 始動するプロジェクト群 I C P シンポジウム・HSS 章の執筆

2-1 「Historically Structured Sampling (HSS)」に関する理論的思考と執筆

ヤーンの離日後、私たちの TEM に関する研究活動は、理論構築とデータ分析という複線径路によって始められた。前者は本の一章の執筆という形で進められ、後者は第 2・3 著者のデータを収集・分析するという作業で進められた。この二つは対立的なものではなく、相補的なものであった。理論的進展がデータ分析に反映し、データ分析のアイディアが理論に組み込まれるということがものすごいスピードで起きていたのである。まず、前者について見ていこう。

TEA に関する最初の論文は「Historically Structured Sampling (HSS)」というものであり (Valsiner and Sato, 2006)、社会科学における「ランダムサンプリング」の概念を批判することに焦点をあてていた。HSS の考え方の基本は、将来の発達事象の研究に焦点を当てるためには、過去のライフコースの証拠をサンプリングに含める必要があるというものであった。しかし、まだ知られていない未来と、過去の出来事を調整することは、大きな理論的課題であった。TEM はその答えを見つけるための最初の試みとして位置づけられていたのである。なお、前述のようにそもそもヤーンは Equifinality Sampling (等至点サンプリング) という構想で、この章を書こうとしていた。彼は無作為サンプリングという方法が、心理学をダメにしていると感じていたからである。

後に Zittoun & Valsiner (2016) は、TEM が社会科学におけるサンプリングという行為の再概念化の副産物であることを指摘している。

なお、TEA は現在ではサンプリングという語を放擲し、「Historically Structured Inviting (HSI)」という名称に変わっている。

2-2 データ分析から生み出されたアイディア

第 2 著者・安田裕子は、自身の修士論文を書くのに忙しく (メ切 2004 年 1 月 31 日)、2004 年 1 月のヤーン来日において彼と会う機会はなかった。しかし、第 1 著者から Equifinality の概念を聞かされたことで、これが自身のデータを再分析するために重要な役割を果たすと直感した。この判断もまた、何故なのか、彼女自身も明確に説明できない (しかし、この直感は正しかった)。彼女は論文を書き上げることができ、翌年に公刊され、TEA (複線径路等至性アプローチ) に関する最初の論文となった (安田、2005)。また、2004 年 8 月の国際心理学会のシンポジウムで発表するために、第 3 著者・木戸も化粧行為に関する分析を行い始めた。

この時、安田・木戸がデータ分析に使用できる方法論的な概念は、分岐点、等至点、複線径路、そして非可逆的時間、といった程度であったが、実際のデータを分析する中で豊富なアイディアが生まれていくことになる。理論とデータ分析の往還によって分析方法が洗練しまた理論的に深化するというのは TEA (複線径路等至性アプローチ) の特徴の一つである。

初期に TEA (複線径路等至性アプローチ) の理念に賛同した二人の研究対象は、子どもを持つことや化粧をするという「女性特有の現象」であった。だからこそ、こうしたテーマを研究することがある種のジレンマを発生させた。それは、子どもをもつ、化粧をするという経験を等至点に設定したとき、これらの経験は女性にとって「憧れ」や「価値」のあるものとして認識されかねないということであった。

研究が社会に対して子どもの有無等についての価値を提示するようなことは可能であれば避けるべきだと考えられるから、サトウ・安田・木戸 (2004) が北京の国際心理学会で行った発表では、等至点の補集合に当たるような経験を等至点として分極化するという発想が取られた。両極化した等至点 (Polarized-EFP) である。このことによって研究者が対象とする現象や経験を、価値の高いものとして見なしているわけではないということ表現できるようになった。さらに重要なことに、P-EFP を設定することによって、時間の次元に対するもうひとつの次元が明確にできるようになった。EFP と P-EFP の次元が時間とは異なる次元として明示できるように

なったのである。EFP のみの図では、径路（トラジェクトリー）の幅の定義が難しかったのだが、その欠点も解消された。そして、結果として、人生径路の多様性がより可視化されるようになったのである。

なお、安田の研究自体は不妊治療のプロセスを研究しようとしていたのだが、養子縁組を考えた人を研究対象としたために、結果的に、妊娠しないまま不妊治療を止めるに至った人を対象として研究を行うことになったものである。日本では一他の文化では考えにくいことだが、養子をとるカップルは不妊治療を止めることが条件となっているのである。そこで、不妊治療を止めるという決断を等至点として設定し、そこに至る径路を検討することになった。そして、この安田の研究によって生まれた概念としては両極化した等至点（P-EFP）の他に必須通過点（OPP）とがある。TEM では等至点に至るまでの径路の多様性を描こうする。しかし、その TEM をもってしてもある時点で多くの人が同じような経験をせざるをえないことがある。これが必須通過点（OPP）として概念化されたのである。

ほぼ同時に研究を行った木戸は化粧における必須通過点として、子どもの頃の受身的化粧の経験を尋ねる面接を行った。しかし、これはあまりうまくいかなかった。必須通過点は、全員が通る点を必ずしも意味しないのだが、女性における受身的化粧は文字通り全員が経験しており、その多様性を表すことができなかったのである。ただし、この研究によってもう一つ重要な概念として社会的力（Social Force）という概念が提唱された。本人が意識するしないにかかわらず、本人の行動に大きな影響を与えている力のことである。これは後に、等至点に向けた力である社会的助勢（Social Guidance）と、等至点から遠ざからせる力である社会的方向づけ（Social Direction）とに分化することになる。

また、2004 年に立命館大学研究部の学術研究助成金に応募し、採択されたことも付記する。応募時点の数ヶ月前に生まれた新しいアイデアの可能性を見だし、思い切って研究助成金を出してくれた立命館大学には本当に感謝している。この助成金のおかげで、定期的に研究会を開催することができ、中国 ICP への 3 名の旅費も賄うことができ、当初の取り組みに大きな弾みをつけることができたのであるから。

2-3 ヤーン・ネットワークへの参入 ブートキャンプ

ヤーンと一緒に初めての TEA 論文を書く過程で、第 1 著者はヤーンのネットワークに深く参加するようになっていった。この論文の草稿は、関係する学者に転送され、有益なコメントを提供してくれた。例えば、タニアやナンディッタなどがこうした仲間である。それらのコメントは論文を修正するために使われた。

2004 年 10 月にはヤーンの家招かれ、5 日間ほど滞在したが、まさにブートキャンプのようなものであった。当時のアメリカのヤーンの家は、クラーク大学から徒歩 5 分のところにあり、アメリカ的な「風呂とトイレが個別にある部屋（キッチンとリビングが共有されている）」であったため、そこに泊めてもらえたのである。というか、ヤーンはそうした滞在者歓待システムを作り上げていたのである。私は滞在中の 5 日間、論文を書いたり、ヤーンと議論したり、論文を書き直したり、訂正されたりしていた。また、キッチンセミナーでプレゼンをして、ずさんな英語ではあったが、アイデアを披露して議論をした。多くの大学院生と知り合いになったし、時には海外からのゲストと交流もできた。

それから 4、5 年間は、年に 2 回ほどウースターを訪問し、ヤーンの家で 1 週間して短期集中的に仕事をしていった。第 1 著者が深夜 2 時か 3 時まで仕事をしてファイルを送っておくと、ヤーンが午前 4 時に起きて手直ししてくれ、第 1 著者が 8 時か 9 時に起きるとディスカッションが始まる。そんなブートキャンプ的な恵まれた状況があって、多くの知識が生産された。また、この恵まれた環境を利用するために、何人もの学生をヤーンの家を送り込んだ。第 1 著者が滞在できたのは毎回 1 週間程度だったが、学生たちは最長 2 ヶ月間滞在し、ヤーンのメンタリングを受けたり、キッチンセミナーに参加して様々な外国人ゲストやクラーク大学の大学院生とディスカッションをしたりして、知識を蓄積し、英語力を磨いていった。このような恵まれた環境があったからこそ、TEA

は発展し、大学院生たちは研究者としての実力を育むことができたのである。

2005年3月にサトゼミの学生として初めてウースターを訪れた大学院生は、第3著者・木戸彩恵だった。当時クラーク大学に留学していた日本人・大野カヤさんの協力を得て、日本人女性がアメリカの滞在中に感じる化粧の違和感についてインタビューをすることができた。この研究は文化移行を扱う彼女の TEA を用いた論文に反映され、また、彼女の博士論文の基礎となったのである。

2-4 ネットワークのさらなる拡大

2004年11月28日、HSS 論文を書いている最中に、第1著者はヤーンに以下のようなメールを送った。

“ETM を TEM に改名したいのですが... 時間的には、軌跡があってそれが等至点に向かうので... そのほうがいいと思うのです。どうでしょうか?”

ヤーンは11月30日に返信した。

“ETM-->TEMは確かに良いですね”

この時点で TEM という略語が確立された。つまり、それまでは ETM (等至点・複線径路モデル) と称されていたのであるが、その後の原稿では TEM (複線径路等至性モデル) が使われることになっていった。実際、この同じメールの中でヤーンから『ケンブリッジ社会文化心理学ハンドブック』への執筆依頼があり、最終的には『Sampling Reconsidered』 (Sato et al. 2007) として出版された。

TEM のその後の展開は、英語と日本語の両方でさまざまに読むことができ、このエッセイの焦点ではないのでここでは省略して、日本の研究者とヤーンのネットワークの展開について扱うことにする。

2004年9月、ヤーンは日本質的心理学協会の第1回大会で基調講演を行うために2度目の来日を果たした。しかし、その後、自身の健康上の問題で来日できず、2007年8月に3度目の来日を果たした。

この時は約2週間滞在し、立命館大学、奈良女子大学、神戸大学、北海学園大学で講演を行い、第16回日本パーソナリティ心理学会 (於帯広畜産大学; 大会実行委員長: 渡邊芳之教授) に参加した。北海道でヤーンを案内したのは尾見康博と岡本依子およびその家族であり、後にクラーク大学で2年以上のサバティカルを経験することになる。渡邊芳之は東京都立大学でサトウタツヤと同級生で、尾見と岡本は後輩である。

立命館の大学院生である滑田明暢は、2007年7月から2008年9月までランカスター大学 (修士課程) に留学していた。第1著者は彼を訪ねると同時に、イギリスで開催された第5回対話的自己に関する国際会議に出席した (2008)。この時、第1著者は学会長のハーマンス教授とは初めての出会いであったが、その暖かい人間性と何より学会全体を包む Trans-national な雰囲気感動した。オックスフォード大学の博士課程で勉学に励んでいたタニア・ジットウンとブレイディ・ワゴナーと初めての出会いがあった。この出会いもまた、後のちに至るまで私たちを幸せにしてくれることになる。

ヤーンの4回目の来日は2008年9月である。日本心理学会第72回大会 (北海道大学) において「心理学の新しい地平線」という講演を行った。

ヤーンのネットワークに参加したことで、私と学生たちは様々な国の仲間と出会う機会を与えられた。第1著者については、2008年12月にタリン大学を訪問し、カトリン・クラセップの博士論文審査 (Defense) の副査 (Opponent) になることさえあった。ちなみにこの時のもう一人の副査はイタリア・サレント大学のセルジオ・サルバトーレであった。タリン大学では初めてアロ・トゥメラに会った。アロは大学の PR ムービーのためにヤーンとサトウタツヤにインタビューを行った。3人だから鼎談である。この鼎談の様子は以下で閲覧可能である。



エストニアは北緯約 60 度と緯度が高いため、夏は白夜になるが、冬は朝 9 時でも真っ暗。12 月は、明るい時間は午前 10 時から午後 4 時くらいまでであった（以下を参照）。

https://www.ritsumei.ac.jp/~satot/TEA/valsiner_Sato_HSS_2006.pdf

引用文献

木戸彩恵 (2011). 日米での日本人女子大学生の化粧行為の形成と変容—文化の影響の視点から— 質的心理学研究 10, 79-96.

Sato, T, Yasuda, Y., & Kido, A. (2004). Historically structured sampling (HSS) model: A contribution from cultural psychology. the 28th International Congress of Psychology (Symposium での口頭発表). Beijing, China. 12th August.

Sato, T, Yasuda, Y., & Kido, A., Arakawa, A., Mizoguchi, H. and Valsiner, J. (2007). Sampling Reconsidered: Idiographic Science and the Analyses of Personal Life Trajectories. In Valsiner, J. and Rosa, A. (Eds.) Cambridge Handbook of Socio-Cultural Psychology, Chapter 4, Cambridge University Press, Pp.82-106

Sato, T., Yasuda, Y., Kanzaki, M., & Valsiner, J. (2014) From Describing to Reconstructing Life Trajectories: How the TEA (Trajectory Equifinality Approach) explicates context-dependent human phenomena. Wagoner B., Chaudhary, N. & Hviid, P. (Eds.). Culture Psychology and its Future: Complementarity in a new key (p. 93-104). Information Age Publishing.

Valsiner, J. (2001) Comparative study of human cultural development. Infancia y Aprendizaje

Valsiner, J. & Sato, T. (2006). Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? In Straub, J., Kölbl, C., Weidemann, D. & Zielke, B. (Eds.) Pursuit of meaning. Advances in cultural and cross-cultural psychology (pp.215-251). Bielefeld: Transcript Verlag.
http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/TEA/valsiner_Sato_HSS_2006.pdf

安田裕子 (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程——治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から。質的心理学研究, 4, 201-226.

Zittoun, T., & Valsiner, J. (2016). Imagining the past and remembering the future: how the unreal defines the real. In T. Sato, N. Mori & J. Valsiner (Eds.), Making of the future: the trajectory equifinality approach in cultural psychology (pp. 3-19). Charlotte, NC: Information Age Publishing.